

2016年7月17日 礼拝メッセージ

聖書：第二サムエル記 21 章 10～14 節

説教：祈りに心を動かされる神

あらすじ

イスラエルはいまやつとのことので一つの国にまとまりかけようとしています。そんなときまた新たな試練に直面します。深刻なききんがイスラエルを襲ってきて人々は食べる物にも事欠くようになります。ダビデは、この問題を解決するために主に伺います。そうすると、主は思いがけないことを言われました。サウルとその一族は、殺してはならないと定められていたギブオン人を殺した。その罪のためにききんが起きた。そのききんが止むためには、罪を償う必要がある。このように主は言われました。

ダビデは早速ギブオン人を呼び出し、尋ねます。「何を償ったらよいのか。」ギブオン人は答えます。「サウル家の七人の子どもを渡して欲しい。自分たちはその子どもたちをさらし者にする。」ダビデはこの要求を受け入れ、サウル家から七人の子どもたちを引き渡しました。それが前回までのあらすじです。

#### 1 アルモニとメフィボシェテの母リツパ

引き渡された七人の子どもたちの中に、アルモニとメフィボシェテという人がて、その母親が 10 節に出て来るアヤの娘リツパです。リツパは荒布を脱いでそれを岩の上に敷いて座たとあります。自分の産んだ二人の息子が殺されました。自分の夫であったサウルの罪のゆえに死ななければならなくなったのですが、どんな理由であれ息子を失った母親の悲しみには変わりがありません。

子どもたちは、山の上で殺され、墓におさ

められずにそのまま捨ておかれ、さらし者にされています。日本でも昔、犯罪人は人々が見ている前で処刑され、首が切られ、その首を板の上に載せてさらし者にしたと言われます。犯罪人の名誉を徹底的にはぎ取り、はずかしめるためにそのようなことをしたのですが、イスラエルでも同じことが行われていました。

リツパは息子たちの死体が無残にさらし者になっていることに心が張り裂けそうなほどだったでしょう。でも、手を出すことは許されない。葬ってやることができません。せめて息子たちのなきがらが鳥に食われないように、あるいは野の獣がやってきて食いちぎられないように、ずっとそばで番をします。変わり果てた息子のそばにいないければならない母親です。どんな思いであったろうかと想像します。

#### 2 ダビデ

1) リツパのしたことはダビデに知らされた

リツパのことを聞いたダビデは、次のような行動を起こします。12 節。「すると、ダビデは行って、サウルの骨とヨナタンの骨をヤベシュ・ギルアデのところから取ってきた。」

いろいろなことが疑問になります。リツパのやったことと、サウルやヨナタンの骨を持ち帰ることとどんなつながりがあるのか。そもそもサウルの骨とヨナタンの骨が父親であるキシユの墓に葬られず、ヤベシュ・ギルアデというところに置かれたままであったのはなぜか。そこあたりのことからふり返り

ます。

## 2) ヤベシュ・ギルアデの人たち

話は、サウルが三十歳の若さでイスラエルの王となったばかりのころにさかのぼります。当時、イスラエルは力がなく、地方の町や村はいつも外敵に襲われて苦しむこともしばしばで、ヤベシュ・ギルアデもそのような町の一つでした。この町にあるときアモン人と呼ばれる人たちがやってきて、自分たちに従わなければ皆殺しにすると脅迫してきます。イスラエルの人々はこの知らせを聞くのですが、敵が怖くて誰も助けようとしません。このことを見ていたサウルは、激しく怒り、国中の人たちに戦いに出よう説得します。そうやってアモン人を倒してヤベシュ・ギルアデの人々を救ったということがありました。ヤベシュ・ギルアデの人たちにとって、サウルはいのちの恩人です。ずっと感謝を忘れることはありませんでした。

それから十二年経った時、サウルはペリシテ人との激しい戦いの最中に、息子ヨナタンとともに死んでいきます。敵であるペリシテ人はサウルとヨナタンのなきがらを持ち去り、ふたりをはずかしめるためにベテ・シャンの城壁にさらしものにしてしまいました。

これを見ていたヤベシュ・ギルアデの人々は黙っていられません。自分たちを救ってくれたサウルがさらし者にされるなど耐え難い。なんとかその恩に報いたいと考え、危険を顧みずにベテ・シャンに忍び込み、サウルとヨナタンのなきがらを持ち帰り、村にあった柳の木の下に葬りました。

12 節に「彼らが盗んで行ったものであった」とあるはそのことです。事情を知らないと、ヤベシュ・ギルアデの人たちがなにか悪

いことをしたかのように読んでしまいますが、決してそういうことではありません。

## 2) サウルとヨナタンの骨を父キシユの墓に葬る

日本では、家族が亡くなれば先祖代々の墓に骨をおさめるという習慣があります。いろいろな事情があつてそれができないと、死んだ者の名誉が傷つくと考えます。七十年以上に前に日本が起こした戦争で、多くの兵士が海外で亡くなりました。いまも遺骨の収集作業が行われていると聞きます。それはやはり死んだ人たちを犬死にさせたくない。名誉を回復すべきだという思いからなのでしょう。

イスラエルでも同じでした。本来ならサウルとヨナタンの骨は、サウルの父であるキシユの墓、つまり先祖代々の墓に葬るべきだったのです。それなのに、仮の墓地に埋葬されたままにおかれ、名誉が傷つけられたままです。ダビデはリツパのしていることを聞き、このことを思い出しました。早速、サウルとヨナタンの骨を携えて上り、サウル家先祖代々の墓に葬ることで彼らの名誉を回復させようと考えました。

## 3) なぜ名誉が回復される必要があるのか

なぜ名誉は回復される必要があるのでしょうか。というのは、イスラエルがききんに襲われたのは、サウルの罪のためではなかったのではないかと。サウルは悪いことをしたのです。そんな者の名誉を回復する必要があるのでしょうか。

確かにサウルは神のみこころに背くような悪いことをしました。絶対に殺されてはならないと言われていたギブオン人との契約を無視して、彼ら殺してしまった。サウルは

罪を犯しました。でもその罪はだれによって償われたのですか。サウル家の七人の息子たちが死にました。そのことで、すでにサウルの罪が償われたのです。罪が償われたのですから、犯した罪のことを問われることはない。となれば、名誉が回復される必要があります。だからダビデはこのようなことをする。

いや、サウルとヨナタンばかりではありません。殺された七人の息子たちのこともそうです。彼らは、自分の身内の罪のために犠牲となり、そのなきがらはさらし者にされたままです。リツパは、母親としてなんとか息子たちの名誉を回復したいと願いました。でもできません。ただそばに座り、なきがらが朽ち果てていくのを見守るしかない。こんな悲しいことがイスラエルの中でいつまでも続いているのでしょうか。いや、絶対にこんなことはあつてはならない。それで、人々は、さらし者にされた者たちの骨を集め、サウル家の墓におさめていきます。そのようにして七人の子どもたちの名誉を回復させ、悲しんでいるリツパを慰めようと心を砕いていくのです。

### 3 神

#### 1) これらの結果

14節の後半にこうあります。「その後、神はこの国の祈りに心を動かされた。」つまりは、かわききった地に雨が降り、イスラエルのききんは止んだということです。

私たちが、大きな試練にあう時、神の祈ります。神が心を動かされ、祈りを聞きつけて欲しいと切に願わされます。そんなとき、私たちは素朴な疑問にとらわれます。どうすれば神は祈りを聞かれるのだろうか。そんな秘訣があれば教えて欲しい。ときどき聞かれる

質問です。一生懸命汗水を流して祈ればよいのか。長い時間をかけて祈ればよいのか。たくさんのお金をすべきなのか。良いことを沢山すれば、神はごほうびのようにして祈りを聞いてくださるのか。いろいろ考えます。聖書には何と書いてあるか。

イスラエルのききんはどうして止んだのでしょうか。14節の後半を直訳するとこうなります。「これらの結果、神はこの地の人々の願いを聞き入れた。」「これらの結果」とは何を指すのか。そこが焦点になります。七人の息子たちが死んだことでしょうか。確かに罪が償われるためにはそのことが必要でした。でも、人が死んだのでききんが止んだというのなら、他の宗教と変わらない。昔の日本でも、雨乞いのために子どもを殺すとか、大きな土木工事で災害が起こらないよう人柱を埋めたということがあったそうです。聖書の神はそんな方なのでしょうか。いいえ、まったく違います。

「これらの結果」とは、何を指しているか。どんな理由であれ、人が死んでいったとき、悲しむ者がいました。リツパがそうでした。リツパが悲しんでいると聞いた時ダビデはいても立ってもいられなくなる。リツパの悲しみを和らげるために、あらゆることをしていきました。神はそのことに心を動かされていきます。悲しむ者がいる時、神は黙ってられない。神は何とかその悲しみを喜びに変えたいと考えます。その最初のこととしてイスラエルに待望の雨を降らせませす。

#### 2) さらし者にされた神

でもそれだけなのではないでしょうか。ただききんを止めた、雨を降らせましたというだけではなのではないでしょうか。神がしてくださることはそ

れだけではありません。もっとその先のことをされます。为什么呢。主イエスは私たちの罪の償いのために十字架でさらし者になり、殺されました。主のみからださがらし者になっていることに心を痛めた人たちが、みからだを降ろして、墓におさめました。人ができたのはそこまでです。墓に入ったらそこですべて終わりだからです。

でも墓におさめた後で何か起きたか。この方は死からよみがえられます。ダビデは、亡くなった者の骨を墓におさめてなんとか名誉が回復しようとしたのですが、それでも不十分なものに過ぎません。

神は違います。死んだ者を墓からよみがえらせることによって、完全に名誉を回復するのだと約束します。ダビデはこのことを信じてこれらのことをしました。

### 3) 祈りに心を動かされる

最後に確認します。いったいどのようにしたら神は祈りを聞かれるのか。なにも難しいことではないように思います。

ダビデはリツパのしたことを聞いて心を痛めました。リツパの気持ちがよくわかるのです。なぜですか。ダビデ自身も息子であるアブシャロムを失ったばかりです。あのと、自分が代わりに死ねばよかったとさえ思っています。だからリツパのことは他人事ではないのです。リツパを慰めなければと思いました。そのために一生懸命働きます。神はそれをご覧になっていました。そして神ご自身も心を動かされていくのです。

ということはなんですか。神は、どのような者の祈りを聞いてくださるのか。心から悲しむ者、涙も涸れるほど、身も心も尽き果てるようにして絞り出すようにして悲しむ者。

そのような者の祈りに心を動かされるのだと教えてください。そんな祈りに応えるために、ひとり子のいのちを捨ててくださると言われます。そのような主の御名をあがめたいと思います。